

尋常 國語讀本 卷一



3期

大正六年十一月廿四日印刷  
大正七年一月一日發行

著作權所有 發行所 文 部 省

印刷所 東京書籍株式會社

東京書籍株式會社

定價金七錢

尋常 小學 國語讀本 卷一

文 部 省

- 凡 例
- 一、本書は文部省著作、大正七年より大正十二年までに発行された版本によつた。
  - 一、尋常小学校第一学年用巻一及び二は全巻出版とし、原本の四頁分を本書の一頁におさめた。原本巻二の「モクロク」中の頁数は本文頁の左右脇の漢数字に一致する。
  - 一、尋常小学校第二学年用以上は二段組とした。原本にある各巻の目録の頁数は省略した。原本のさし絵はすべて縮小して本文に近いところに入れた。
  - 一、文字、表記法、上欄抽出文字はすべて原本のままとした。字体はなるべく本文に近い活字を用いた。巻十一の第十課、巻十二の第二十四課の手紙文の字体は行書に近い活字となっているが、これは現字体に改めた。

尋常  
小學  
國語讀本  
卷一



大正六年十一月廿四日印刷  
大正七年一月第一日印刷

著者 文部省  
著作名 尋常小學國語讀本  
發行所 東京書籍株式会社

定價 七錢

尋常  
小學  
國語讀本  
卷一

文部省

凡例

- 一、本書は文部省著作、大正七年より大正十二年までに発行された版本によつた。
- 一、尋常小学校第一学年用巻一及び二は全巻凸版とし、原本の四頁分を本書の一頁におさめた。原本巻二の「モクロク」中の頁数は本文頁の左右脇の漢数字に一致する。
- 一、尋常小学校第二学年用以上は二段組とした。原本にある各巻の目録の頁数は省略した。原本のさし絵はすべて縮小して本文に近いところに入れた。
- 一、文字、表記法、上欄抽出文字はすべて原本のまゝとした。字体はなるべく本文に近い活字を用いた。巻十一の第十課、巻十二の第二十四課の手紙文の字体は行書に近い活字となっているが、これは現字体に改めた。

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	エ	ヨ	
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	キ	ウ	エ	ヲ

モロク

一	カ	キ	ク	ケ	コ
二	サ	シ	ス	セ	ソ
三	タ	チ	ツ	テ	ト
四	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
五	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
六	マ	ミ	ム	メ	モ
七	ヤ	イ	エ	ヨ	
八	ラ	リ	ル	レ	ロ
九	ワ	キ	ウ	エ	ヲ
十	カ	キ	ク	ケ	コ
十一	サ	シ	ス	セ	ソ
十二	タ	チ	ツ	テ	ト
十三	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
十四	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
十五	マ	ミ	ム	メ	モ
十六	ヤ	イ	エ	ヨ	
十七	ラ	リ	ル	レ	ロ
十八	ワ	キ	ウ	エ	ヲ
十九	カ	キ	ク	ケ	コ
二十	サ	シ	ス	セ	ソ
二十一	タ	チ	ツ	テ	ト
二十二	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
二十三	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
二十四	マ	ミ	ム	メ	モ
二十五	ヤ	イ	エ	ヨ	
二十六	ラ	リ	ル	レ	ロ
二十七	ワ	キ	ウ	エ	ヲ
二十八	カ	キ	ク	ケ	コ
二十九	サ	シ	ス	セ	ソ
三十	タ	チ	ツ	テ	ト

チ



イマ ツナヒキノ  
マツサイチユウ  
デス。

ゴラン ナサハ、  
シナガチカラヲ  
イレテ、一シヤウケ  
シテ キマス。

ク



一 ウンドウ  
クワイ  
コレ ハウ  
クワイノエ  
デス。  
イロイロナ  
バダガ  
カゼ ニ  
ヒラヒラ  
シテ キマス。

カ



モモトラウハ、カダナ  
ヲ又イテ、一バン  
ホキナ、オニニムカ  
ヒマシタ。

オニトモハ、カウサシテ、  
ダイジナタカラモ、ヲ  
ダシタ。

モ



モシヲセツテ  
セメコシマシタ。  
キジハツツキ  
アリ、サルハ  
ヒツカキ、イ  
又ハ、カミツキ  
アリマス。

ク



クハ、イヌガヒ  
キマス、エチラヤ。  
サルガ、アトオス  
エチラヤ。キジガ  
ツナヒクエチラヤ。  
クハ、イヌガヒ

尋常 國語讀本 卷三

一 イマ ハ  
二 ハヤオキ  
三 ヒヨコ  
四 うちの 子ねこ  
五 お花  
六 ゆび の な  
七 かんがへもの  
八 わらびとり  
九 竹の子  
十 きやうだい  
十一 五いちいさん  
十二 右 ト 左  
十三 まはりつこ

十四 うらしま太郎  
十五 四方  
十六 私ノ村  
十七 一口ばなし  
十八 をの の たうふう  
十九 セミ  
二十 ささ舟  
二十一 水デツパウ  
二十二 虫ばし  
二十三 カウモリ  
二十四 十五や  
二十五 ふじの山  
二十六 はごろも

モクロク

さくら

はち

ひばり

こうば

イマ ハ サクラ ヤ  
ナタネ ノ 花ザカリ  
デス。 テフテフ ハ  
花 カラ 花 ヘ ヒ  
ラヒラト マヒ、ハチ  
ハ セツセトミツヲ  
アツメテ キマス。  
ミチバタ ニハ スミ  
レ ヤ タンポポ ガ  
サイテ キル シ、ム  
ギ畠 ノ上 ニハ ア  
サ ハヤク カラ ヒバリ ガ サヘヅツテ  
キマス。  
カゼ モ アタタカ デ、オモテ デ アソブ  
ニハ 一バン ヨイ トキ デス。  
二 ハヤオキ  
コウバ ノ キテキ ガ ナツテ キマス。 マ  
ダ ウスグラウ ゴザイマス ガ、ケサ コソ  
ニイサン ヨリ サキ ニ オキテ ミヨウト  
オモツテ、ソツト ネットコヲ 出マシタ。  
トヲ アケル ト、ムカフ ノ ソラ ガ ウ



ニ アカク、イビキハカミナリ  
ノ ヤウ デシタ。  
ライクワウ ハ スコシモ オソ  
レズ、タチヲ スルリト ヌイ  
テ キリツケマシタ。 シユテンド  
ウジ ハ オコツテ クルヒマハ  
リマシタ。 タチガ ヒカレバ、目



ドウジノ テシタヲ ノコラス  
タイヂシテ シマヒマシタ。  
ヲハリ

小 二 人

「あかい きものをきて みます。」  
 「それでは をんな でせう。」  
 「いいえ。」  
 「それでは をとこの子 です か。」  
 「いいえ。としより です。」  
 「どうも こまりました。どんな かほを  
 して みます か。」  
 「かほちゆう ひげだらけ です。」  
 「それでは ても あしも ないでせ  
 う。」  
 「はい。」  
 「わかりました。だるま さん です。」

八 わらびとり

め み



「さう です。それでは あしの ゆび  
 の なをしつて みます か。」  
 「おなじ こと でせう。」  
 「まあ、いつて ごらん。」  
 「おやゆび、人さしゆび。」  
 おぢいさん は わらひ ながら、  
 「二郎、おまへ は その ゆびで 人  
 さします か。あしの ゆびは、おやゆ  
 びとこゆびの ほかには ながな  
 いの です。」  
 とをしへて やりました。

七 かんがへもの

「この はこの 中に、おもしろい 人が  
 あります。あてて ごらん なさい。」  
 「その はこを かして ください。」  
 「はい。」  
 「ふつても よう ございます か。」  
 「はい。」  
 「たいそう かるう ございますね。この  
 人は どんな いろの きものを きて  
 みます か。」

て かけ上つて くる  
 ものが あります。  
 二人が びつくりし  
 て 見て みますと、  
 それは 小二郎の  
 うちの いぬ だ  
 した。犬は はなを  
 くんくん いはせ、  
 をを やたらに  
 ふつて、 小二郎  
 の そばへよ  
 つて きました。

それから その へんを むやみに かけ  
 まりました。

又とりはじめて、二人は たくさん とつ  
 て からくらべて みました。どちらも た  
 いてい おなじくらゐで、かちまけは あ  
 りません でした。

その とき 正一の おぢいさんが、たき  
 ぎを うまにつけて、そこへ きました。  
 二人は よろこんで、おぢいさんに つ  
 いて かへりました。

二 ふゆ

からい  
 つて、だ  
 つこそを  
 して お  
 かあさん  
 の ところ  
 ろへ つれて いきます。

お花 は ことし 九つ です。

六 ゆびの な

ゆふはん が すんだ あとで、おぢいさん  
 が 二郎 に たづねました。

「おまへ は ての ゆびの なをし  
 つて みます か。」  
 「しつて みます。一ばん ふといの が  
 おやゆびで、一ばん ほそいの が こ  
 ゆび です。」  
 「それ から。」  
 「それ から、一ばん ながいの が 中  
 ゆびで、中ゆびと おやゆびの あひ  
 だに あるの が 人さしゆび、中ゆび  
 とこゆびの あひだにあるの が く  
 すりゆび です。」



わ

りです。  
 十きやうだい  
 ゆふの雨でくさや木の  
 みどりいろますなつのあき  
 つつみかかへてがくから  
 つれだちいそぐあねおと。  
 足すべらせててけかかる  
 おととをかばふあねのうで  
 かばふはずみにあねはまた  
 足だのはなをふつりと。  
 「ねえさんこれをあげます。」と、  
 こしにはさんだ手ぬぐひの  
 はしひききてさし出せば、  
 「正さんこれがあります。」  
 小川の水で手をあらひ、  
 あねは手ばやくをたて、  
 「きいませう。」ときやうだいは  
 がくからさしていそぎゆく。

長

車料

十一 五いちいさん  
 村はづれに水車やがあります。村の  
 人は五一車とよんでゐます。五いち  
 いさんがその水車やのばんをし  
 てゐるからです。  
 五いちいさんはおもしろいぢいさん  
 ず。「からすのなかない日はあつて  
 も、五いちいさんがうたはない日はな  
 い。」と村の人からいはれるほど、  
 いつもきげんよくうたをうたふぢ  
 いさんです。  
 長いはんでんをきて、みじかいももひ  
 きをはいて、こぬかだらけになつては  
 たらくぢいさんです。  
 さぶさぶおちる水のおと、とんとん  
 ひびくきねのおと、そのにぎやかな  
 中から、  
 「じとなされよ  
 きりきりしやんと、  
 かけたたすきの  
 きれるほど。」  
 五いちいさんのうたふこゑがきこえ

小一郎がうちへかへつてみますと、  
 尖はもうとつにかへつてゐて、か  
 けてきてとびきました。  
 この三日の雨で、竹の子がこん  
 なに出来ました。むぐらもちでもとほつた  
 やらに、土がとるどころもち上つて

九竹の子

ん
わぬらゑを
らりるれろ
やいゆえよ
まみむめも
はひふへほ
なにぬねの
たちつてと
さしすせそ
かきくけこ
あいうえお

かきくげこ
ざじずぜぞ
だちつでど
ばびぶへぼ
ばびぶへぼ
ばびぶへぼ

方

石

高

あります。そこから竹の子が出るの  
 です。  
 このあひだかきねのそばへ出たの  
 は、もう私のせいより高くなりま  
 した。かすのびてはとでもたべられま  
 せん。  
 石がきの下へ出たのはかはお  
 ちはじめ、竹になりかかつてゐます。  
 あれはいまにさき竹にでもなる  
 のでせう。  
 又あそここに  
 わらをむすびつけ  
 てあるのは、ほほ  
 りとらないしるし  
 ので、のばしておや竹  
 ださうです。  
 す。むかふ  
 の方に、  
 二本ならんでゐるほほい竹の子は、い  
 まに竹になつたら、おちいさんに、あれ  
 で竹うまをこしらへていたたくつ



箱 玉

母 父



おとひめ

「いろいろ おせわ  
になりました。あ  
まり 長く な  
ります から、  
もう おいとま  
に いたしませ  
う。」

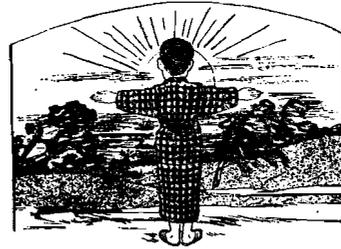
と いひました。  
おとひめ は

「それは まことに おなごりをしいこ  
とで ございます。それ では この 玉  
手箱を 上げます。どんな ことが あつ  
ても、ふたをおあけ ないますな。」  
と いつて、きれいな箱を わたしまし  
た。  
うらしま は 玉手箱を もらつて、又か  
めの せ中 につて、海の上へ 出  
て きました。  
うちへ かへつて みると、おどろきまし  
た、父も 母も しんで しまつて、うち  
も なくなつて みて、村の やうすも す

東 西

北 南

學校



つかり かはつて みます。しつて あるも  
のは 一人も ありません。かなしくて  
かなしくて たまりません から、おとひめ  
の いつた ことも わすれて、玉手箱を  
あけました。あけると、箱の中 から 白  
い けむり が ぱつと 出て、うらしま は  
たちまち 白が の おちいさん になつて  
しまひました。

十五 四方

日ノ 出ル 方ガ  
東デ、日ノ ハ  
イル 方ガ 西デ  
ス。  
東へ ムイテ リ  
ヤウ手 ヲ ヒロゲ  
ルト、右ノ 手  
ノ 方ガ 南デ  
左ノ 手ノ 方  
ガ 北デス。

東 西 南 北 ヲ 四方 ト イヒマス。

十六 私ノ 村

學校ノ 北ニ 小高イ ヲカガ アリマ

ス。ヲカノ 上ニ 天ジン サマノ オ  
ミヤガ アリマス。ソコへ 上ルト、私  
ノ 村ハ 一目ニ 見エマス。  
村ノ 中デ、一バン 目ダツ ノ ハ 私  
ドモノ 學校 デス。大キナ 家ガ 三ムネ、  
「コ」ノ 字ナリ ニ タツテ キマス。學校ノ  
東下ナリ ニ 二カイヅクリ ノ ヤクバガ  
アリマス。

青 寺 光

何

ヤクバノ ヨコデ 川ガ ニツ オチア  
ツテ、マガリ クネツテ、南ノ 方へ ナ  
ガレテ イキマス。  
キヨネン デキ上ツタ 新道ハ、村ヲ 東  
カラ 西へ、マツスゲニ ツキスイテ キマ  
ス。新道ノ リヤウガハ  
ニハ、新シイ 家ガ 七八  
ケン デキマシタ。ソノ 中  
ニハ、ニウリヤ モ アリマ  
ス。今ソノ ミセノ マ  
ヘニ 二車ガ トマリマ  
シタ。車ヲ ヒイテ キタ  
人ガ ベンタウ デモ タ  
ベルノ デセウ。



ツイ コノ アヒダ ウエタ 田ガ、モウ ア  
ンナニ 青ク ナリマシタ。  
ドコカ ヲカノ 下デ、ニハトリ ガ ナ  
キマス。モウ オヒル ニ ナツタノ デセ  
ウ。オ寺ノ カネモ ナリ出シマシタ。  
十七 一口ばなし

一 雨の あな

二 星とり

子ども が そら一めん の 星 を 見て、  
「ああ わかつた。あの 光る ところが  
雨の ふる あな だ。」  
「おい、長い さを を ふりまはして、何  
をして ゐ  
るの だ。」  
「星を 二  
つ 三つ は  
たきおとさ  
うと して  
ゐるの だ。」  
「ばかなこ  
とをいふ。そんな ところ で とどくも  
のか。やねへ 上つて はたけ。」



森立宮店賣

一 お祭  
うぢがみさまの森で、あさからた  
いこのおとがします。今日はお祭  
です。大きな字を書いたのぼりがす  
みきつた空に立つてゐます。



おひるすぎに、をばさんのうちからお  
とよさんと太郎さんが来ましたの  
で、三人でお宮へまゐりました。  
鳥のあたりは、道のりやうがは  
に、いろいろな店がならんでゐます。  
おもちゃやにはらつばやかたなや  
ひかうきなどがならべてあります。ほ  
ろつきやふうせん玉  
を賣る店も出て  
ゐます。又あめや  
やくわしやでは、  
はやし立てておき  
やくをよんでゐま  
す。  
ちやうど人の出さ  
かりで、お宮のす  
ずがひつきりなしに

音 今年

柿 生

下男

なつてゐます。私ももすずをな  
らしてをがみました。  
お宮のうらではすまふがはじまつ  
てゐて、「わあわあ」とはやすこゑが  
きこえます。  
あちらこちらに子どものならすら  
つばやふえの音もして、たいそう  
にぎやかです。  
今年には田がよく出来たので、ば  
んにはそのおいほひの花火が上  
るさうです。

二 柿

私のうちには柿の木が五本あ  
ります。しほ柿が三本、あま柿が二本  
で、その中に私の木が一本あ  
ります。あま柿です。これは私が生れ  
た年、おぢいさんが私のぶんにつ  
ぎ木をして下さつたのださうで  
す。  
おぢいさんがこの柿の木をつい  
でいらつしやる時、下男の太七が  
わらひながら、

孫 枝 取

式 長 節

「でんきよさま、そのお年でつぎ  
木をなさるのですか。」  
といつたさうです。その時 おぢいさ  
んは  
「孫へのこしてやるのさ。」  
とおつしやつたといふことです。

今年には柿の  
あたり年で、  
どの木にも  
よくみがな  
りました。私  
の木も枝  
がをれるほ  
どなつてゐ  
ます。きのふ  
一つ取つて  
みましたら、  
もう黒くごま  
をふいてゐ  
ました。



この二十五日はおぢいさんのめい日  
です。から、たくさん取つてそなへるつ  
もりです。

三 十月三十一日

キノフ ハ十月三十一日デ、天長節ノオ  
イハヒ日 デシタ。學校ノ式 ガスンデ

谷

國中 皇

黄

朝

カラ、トモダチ トムカフ ノ山 へ上  
リマシタ。  
村ノ方ヲ見ルト、ドノ家ニモ  
コクキガ出シテアリマシタ。谷ソコノ  
一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サ  
ナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシ  
タ。  
キノフ ハ日本國中ノ人ガミンナ  
天皇ヘイカノバンザイヲイハツタノ  
デス。

四 麥まき

ならやくぬぎの  
はは黄にそまり、  
廣いたんぼに  
北風あれる。  
風に吹かれて、  
なま土ふんで、  
今日も朝から

せい出すおや子。  
おやはかへして、  
子はくれうつて、  
廣いたんぼの

早

出主

神様

へ 神様 ガタ ガ オ通りガカリ ニ ナツテ、  
 「ナゼ ナク ノ カ。」  
 ト オタヅネ ニ ナリマシタ。ワケ ヲ 申  
 シ上ゲマス、  
 「ソレ ナラ 海ノ 水ヲ アビテ、ネ  
 テ 居ル ガ ヨイ。」  
 ト オラシヘ ニ ナリマシタ。  
 白ウサギ ハ スグ 海ノ 水ヲ アビマ  
 シタ ガ、前 ヲリ モ カヘツテ イタク ナ  
 ツテ、 クルシガツテ 居マシタ。  
 ソコ ヘ 大國主ノ神 ガ オ出デ ニ ナリ  
 マシタ。コノ 神様 ハ サキホド オ通り ニ  
 ナツタ 神様 ガタ ノ 弟ノ 方 デス。  
 兄様 ガタ ノ オトモ ヲ シテ、フクロ  
 ヲ カツイデ イラツシヤツタ ノデ、 オオ  
 クレ ニ ナツタ ノ デス。  
 コノ 神様 モ、  
 「ナゼ ナク ノ カ。」  
 ト オタヅネ ニ ナリマシタ。白ウサギ ハ  
 目 ヲ コスツテ、又 ソノ ワケ ヲ 申シ  
 上ゲマシタ。スルト 神様ハ  
 「ソレハ カハイ サウダ。早く 川へ

後

ト ラシヘテ 下サイマシタ。  
 白ウサギ ガ ソノ 通り ニ シマス ト、  
 カラダ ハ スツカリ モトノ ヤウ ニ ナ  
 ホリマシタ。ヨロコンデ 大國主ノ神 ノ ト  
 コロヘ オレイ ニ 行ツテ、  
 「オカゲサマ デ、カラダ ハ コノ 通り  
 ニ ナホリマシタ。アナタ ハ オナサケブ  
 カイ オ方 デス カラ、後 ニハ キツト  
 オシアハセ ノ ヨイ コト ガ ゴザイマ  
 ス。」  
 ト 申シ上ゲマシタ。  
 ソノ 後 大國主ノ神 ハ、白ウサギ ノ イ  
 ツタ 通り、エライ オ方 ニ オナリ ニ ナ  
 リマシタ。  
 六 をちさんの うち  
 山 一つ むかふの 村に をちさんの



行ツテ、シホケノナ  
 イ水 デ カラダ  
 ヲ アラツテ、ガマ  
 ノ ホラ シイテ、  
 ソノ 上ニ コロガ  
 レ。」

少

多 居

島 氣

麥

「やつと すんだ。」と  
 見上げる 空に、  
 あす も 天氣 か、  
 夕日 が 赤い。」  
 五 白ウサギ  
 島 ニ キタ 白ウサギ ガ、ムカフ ノ 大  
 キナ ヲカヘ 行ツテ 見タイ ト オモツ  
 テ、海ヲ ワタル クフウヲ シテ キマ  
 シタ。アル 日 ハマベヘ 出テ 見ル ト、  
 ワニザメ ガ 居マシタ カラ、  
 「オマヘ ノ ナカマ ト ワタシ ノ ナ  
 カマ ト、ドツチ ガ 多イ カ、クラベテ  
 ミヨウ。」  
 ト イヒマシタ。ワニザメ ハ  
 「ソレ ハ オモ白カラウ。」  
 ト イツテ、スグニ ナカマ ヲ 大ゼイ ツ  
 レテ 來マシタ。白ウサギハ コレヲ 見  
 テ、  
 「ナルホド、オマヘ ノ ナカマ ハズキ  
 ブン 多イ。ワタシ タチノ 方ガ 少イ  
 カモ シレナイ。オマヘ タチノ セ中  
 毛

ノ 上ヲ アルイテ、カゾ  
 ヘテ ミル カラ、ムカフ  
 ノ ヲカ マデ ナランデ  
 ミヨ。」  
 ト イヒマシタ。  
 ワニザメ ハ 白ウサギ ノ  
 イフ 通り ニ ナラビマシタ。  
 白ウサギ ハ 一ツ ニツ ト  
 カゾヘテ、ワタツテ 行キマシ  
 タ ガ、イマ 一足 デ ヲカ  
 ヘ 上ラウ ト イフ トコロ  
 デ、  
 「オマヘ タチ ハ ウマク  
 ワタシ ニ ダマサレタ ナ。  
 ワタシ ハ コノ ヲカヘ 來タカツタ ノ  
 ダ。」  
 ト イツテ ワラヒマシタ。ワニザメ ハ ソ  
 レヲ キク ト、タイソウ オコツテ、一バ  
 ン シマヒニ 居タノ ガ、白ウサギノ  
 毛ヲ ミンナ ムシリ取ツテ シマヒマシタ。  
 白ウサギハ イタクテ タマリマセン カラ、  
 ハマベニ 立ツテ、ナイテ 居マシタ。ソコ



今

うちが、あります。私はきのふふろしきづつみを持って、おつかひに行きました。

をちさんのうちでは、には一ぱいもみ、がほしてあつて、足のふみばもないくらゐでした。うちの人はみんな、たんぼへ出て、おばあさんが日あたり、のよい、えんがはで、つぎ物をして、いらつしやいました。

おばあさんはもう耳が遠いので、大きなこゑで、

「おばあさん、今日は。」

といふと、ふりかへつて、

「おう、三ちゃんか。よく来たね。」

といつて、ふろしきづつみをうけ取つて、とだなからうでたくりをおぼんに一ぱい持つて来て、下さいました。

前の畠の柿の木は、はがまつかになつてゐて、二つ三つとりのこしてある柿が、赤い玉のやうに光つてゐます。

えんさきのさぎんくわに、目白が二

町電屋

は来てゐて、枝から枝へとんでゐます。にはとりが、時時、もみをかき出します。おばあさんが「ぼち、ぼち」といつて、おおひになりますと、にはとりより、さきに、すずめが、くらのやねへにげて、行きます。

おばあさんが

「今日は、こんなにもみがほしてあるから、をちさん、もをばさん、も早くかへります。もつとあそんで、お出で。」

といつて、おとめに、なりました。が、おそくなる。とおもつて、いただいたくりを持って、かへりました。

七 私どもの町

私どもの町でも、このあひだから電とうがつくやうになりました。町のやくばも、けいさつしよも、いうびんきよくも、みんなのきらんぶが、電とうにかはりました。

米屋、ごふく屋、小ま物屋、あら物屋、くすり屋、さか屋、さかな屋、そのほか、大きな店は、いくつも、電とうをつけまし

夜店

町話

工場



た。本町通は夜もひるのやうで、りはつ店などはまぶしいほどです。

私のうちでも二つつけました。電とうはらんぶとちがつて、へやのすみずみまであかるく、その上火のようじんもようござい

向友答

よこ町に電氣の力で、米をつく家も出来ました。電話も近い中に私どもの町へかかるさうです。

又町はづれに大きな工場のふしんが、はじまつて、居ます。もう、高いえんとつは、大方出来上りました。これは、大じかけで、れんぐわをやく工場です。これが、出来上るころには、てつだらが、私どもの町を通つて、工場の近くに、ていしや場が出来、さうです。さうなつたら、町は、どんなにべん

話

りになるでせう。

八 山びこ

正太郎が犬をつれて、山道を通りました。犬のすがたが見えなくなつたので、「ぼち、ぼち」とよびますと、向ふの方で、「ぼち、ぼち」と口まねをするものが、あります。

友だちでも、居るのかとおもつて、「おうい」とよぶと、「おうい」といひ、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。正太郎がおこつて、「ぼか」といひますと、又向ふで、「ぼか」と口まねをします。そこへ、ぼちが、来ましたので、一しよに、向ふの方へ、行つてみ

ました。が、だれも居ませんでした。うちへかへつて、父にこのことを話しますと、父は

「それは、山びこです。だれも居るのでは、ありません。」

とをしへました。

正「山びことは、何のことです。ございますか。」

峠 半

七つの色をならはせて、空のまきぬへ一筆に、だれがかいたか、虹の橋。

さて、虹はおもしろい。雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の遠きをつなぐ雲の上。だれが渡るか、虹の橋。

あれ、虹がきえて行く。あのおぎやかな色どりもしたいくらうくなり、小山の方はもう見えぬ。だれがけすのか、虹の橋。

作太郎は父につれられて、はじめて町へ行きました。村ざかひの峠へ上りますと、もう町が目の下に見えます。

「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

「さう。これで中々近くはない。あのたんぼ

明 壁 製 織 生 馬 歸 下 雨 言

の中に、ちよつとした森があるだらう。あれは神明様の森だが、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。」

「神明様のところにある白壁造の家は工場ですか。」

「あの青田の中にあるのだらう。あれは製織工場で、女工が四百人も織を取つてゐる。うちの隣もあの工場で生織になつたはずだ。」

「あ、町の方へ馬車が二だいかけて行きます。」

「今日は買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで来てもよい。」

二人は峠を下りて、となり村へはいりました。道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田の草取りのさい中です。

「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでゐますのに、此の村にはよく水がありますね。」



置 匱

巻五

地 考

「よく氣がついた。此の村には、向ふの杉山のすそに、大きな用水池があつて、其所から水を引くからだ。」

「私どもの村では、どうして池を掘らないのせう。」

「來年あたりから掘るとになつてゐる。少しまはり道だが、となり村の用水池を見て行くことにしよう。」

「用水池には大きな鯉が居ませうね。」

「鯉も居るが、それよりも、もつとお前に聞かせて置きたい話がある。」

十九 用水池

昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふと「あゝあの貧乏村か。」と言はれたものだらうだ。此のあたりの青田も、其の頃は太ていあれ地、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

ところが、今から百三十年前に、此の村の庄屋が、村のことをいろ／＼と考へたすゑ、どちかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたものだと思つた。田地にするには、水がいるが、引いて来る川がない。どうし

掘

相 談 夫 贊 成 劑 手

ても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。

此の事を村の相談にかけた。村の人々は中大きな仕事だとは思つたが、さうでもしなれば、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、みんな賛成したといふことだ。

着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。物なれた人には相談をかけた。

いよ／＼其の年になつて、庄屋は普請方をよそからつれて來た。村の人は代り合つて、一日置に普請の手つだひをすることになつた。土を掘る、石を運ぶ、櫓をうめる、土手をつくり、いろ／＼の工事に、村の人は普請方のさしづうけてはたらいだ。

土手は長さが三百間、高さが六間半、幅は一丈三間といふ大きなもくろみであつた。

「そんな大きな池がいるだらうか。」

と言つて、首をひねる者もあつたといふが、一年ばかりの間は、べつだんくじやうも出なかつた。氣早な者は自分の持地を田に造りかへたと



て、此の外に中央郵便局の分室もあれば、兩替店や、いろ／＼の賣店もあります。又洗面所もあれば、食堂しょくどうもあります。

此の停車場から、毎日七八千人づつの人に乗降りします。汽車の發着時刻が近づくと、自動車・馬車・人力車がいくだいたなく、入口・出口によつて來ます。

はじめて東京見物に來て、此の停車場へ降りる人は、大てい先づ第一に宮城をさしてまゐります。

尋常小學 國語讀本 卷六

もくろく

- |     |         |      |          |
|-----|---------|------|----------|
| 第一  | 倭の山     | 第十四  | 冬の夜      |
| 第二  | 日本の高山   | 第十五  | 萬じゆの姫    |
| 第三  | ヤクワント   | 第十六  | 磁石       |
| 第四  | テツビン    | 第十七  | けんやくと義捐  |
| 第五  | きのこ取    | 第十八  | 賀茂川      |
| 第六  | 一 しけ    | 第十九  | メリンス     |
| 第七  | 二 なぎ    | 第二十  | 氷すべり     |
| 第八  | 霜       | 第二十一 | 神風       |
| 第九  | 虎と蟻     | 第二十二 | 象        |
| 第十  | 町ノ朝     | 第二十三 | 千早城      |
| 第十一 | 弓流し     | 第二十四 | 記念の木     |
| 第十二 | 入替した兄から | 第二十五 | 芽        |
| 第十三 | 笑ひ話     | 第二十六 | 伊勢參宮     |
|     | をほり     |      | 一 入替中の兄へ |
|     |         |      | 二 父から    |

實 種類 酒

ちりがつもつて山となり、しづくがよつて海となる。

二十四 ブドウ

庭サキノブドウ棚ニ、今、夕日ガサシテキマス。フサク／＼ト下ツタウスムラサキノ實ハ、美シイ玉ノヤウニ見エマス。モウアマクナツテキマセウ。

叔父サンノウチニモ、ブドウ棚ガゴザイマス。ソレニハ黒ミノアルムラサキ色ノ實ガナツテキマス。ウチノブドウトハ種ガチガフノダサウデス。

ブドウニハ、マダイロ／＼ノ種類ガアルトイヒマス。私ドモハブドウノ實ヲ生デタバマスガ、タクサン作ル所デハ、ブドウ酒ヲ造ツタリホシブドウニシタリスルト申シマス。

二十五 熊のさゝやき

二人の者が山の中を通ると、熊くまが出て來ました。一人は早く見つけて、木の上へにげ上りました。一人はもうにげる間がないので、地にたふれて、死んだふりをしてゐました。熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございませう。

停洋第 帝 役 左右

熊が來て、からだ中かぎまはしましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

此の時、木に上つてゐた者が下りて來て、

「どんなにこはかつたらう。僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。」

「うん。『あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。』と言つた。」

二十六 東京停車場

東京停車場は東洋第一の大停車場で、宮城みやぎの東にあります。赤れんぐわの三階造で、間口が百八十四間もあります。向つて右が入口、左が出口で、まん中が帝室用になつてゐます。停車場の階上には、役所もホテルもあります。階下の入口には、左右に大きな待合室があつ



クカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワカス私  
モ、私ノ乗ルゴトクモ鐵デス。其ノ外、釘ヤ  
針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍艦  
ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ造ル  
コトガ出来マセン。今デハ鐵ハオアシノ仲間  
ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅  
以上デス。」

「ソレデモ鐵ハチキニサビテ、赤クナルデハ  
アリマセンカ。」

ト言ヒマシタ。其ノ時鐵ビンハ

「私タチノサビルノハ人ガ使ハナイカラデ  
ス。モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、  
イツデモ光ツテキマス。銅ハ人ニ使ハレテキ  
テモ、時々青イ物ヲ出シマス。アレガヤハリ  
サビデス。シカモ其ノサビハ大ソウ毒ナ物デ  
ス。」

ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。

第四 きのこ取

二三日降りつゞいた雨がからりとはれたので、  
昨日のお書すぎ、にいさんときのか取に行きま  
した。松山の入口で、赤くなつてゐたくみを一

折 意 紅茸初

落 家 住 木

枝折ると、

「そんな大きな枝を。」  
と、にいさんに注意されました。

僕がぐみをたべてゐる間に、にいさんは初茸を  
五六本取つたやうでした。僕が紅色のきれいな  
きのこを取つて、にいさんに見せましたら、

「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其の手でぐ  
みをたべてはいけない。」

と、にいさんが言ひました。僕はびつくりし  
て、ぐみも紅茸も地面へなげつけました。

それからにいさんと、ざふ木林へはいつて、  
じめくした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取  
りました。

だん／＼上つて行くと、

山の中でも、三軒家でも、

住めば都よ、わが里よ。

木びきの力藏さんがうたをうたひながら、大き  
なのこぎりで板をひいてゐました。何の木か、  
おがくづが大そうよくほつてゐました。にい  
さんが

「今日は。」

と言つて、

「此の近くに、しめぢの出る所はありません  
か。」  
とたづねますと、

「さあ、まだ早いかも知れない  
がね。」

と言つて、栗林の下のくぼ地を教  
へてくれました。

行つて見ますと、なるほど少し早  
すぎましたが、それでも、小さな

しめぢが列を作つて出てゐまし  
た。ふまないやうに注意して、か

ご一ぱい取つて歸りました。歸り  
がけに、力藏さんにお禮を言ひましたら、

「一雨降つたら、又お出で。」  
と言ひました。

第五 海

一 しけ

鉛色の空は次第々々に低くなつて來ます。風が  
ひゆうつとらなつて來るたびに、濱の松は身を  
ふるはせて、頭を地に着けさうにします。うち  
よせて來る波は、岩をかみ、小じやりとばし  
ては、さあつと引いて行きます。もとより舟は



船 沖

義 平

一 そりも出てゐません。いつも通る汽船も、高  
波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は  
少しも聞えませんが、

冬時の海には、よくこんなことがあります。こ  
んな時には、

「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」  
と言ふれふしのかゝが、其所此所にします。

二 なぎ

空もみどり、

海もみどり、

空につゞく海のみどり、

海につゞく空のみどり、

すみきつて、

かゞみとかゞみ。」

沖ものどか、

濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、

濱へ歸る父の小舟、

すれ合つて、

ゑがほとゑがほ。」

第六 くりから谷  
木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわ

テ、時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上ツテ來ル。コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノデア

ル。キレイナ水ガサラ／＼流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中へ卵ヲ産ム。卵ハ小豆程ノ大キサデ、ウスアカイ玉ノヤウニ見エル。一匹デ三四千粒モ産ムトイフガ、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。サウシテ外ノ魚ガ其所へ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海へ歸ル。中ニハ其所デツカレテ死ンデシマフノモアル。

翌年ノ春ニナツテ、卵カラカヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海へ行ク。四五年モタツト、大キクナツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川へ上ツテ來ルガ、フシギニ自分ノ生レタ川へ歸ツテ來ルサウデ、「之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタラヨカラウ。」ト叔父サンガ言ハレタ。

鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。

第十四 冬の夜  
ともし火近く

忘 語 繩 勇 樂

衣ぬふ母は  
春の遊の  
樂しさかたる。

居ならぶ子どもは  
指を折りつつ、

日數かぞへて、  
喜び勇む。

あろり火はとろく、  
外は吹雪。」



あろりのはたに繩なふ父は  
すぎしいくさの手がらを語る。

居ならぶ子どもはねむさ忘れて、  
耳をかたむけ、こぶしをにぎる。

あろり火はとろく、外は吹雪。」

第十五 萬じゆの姫

源頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事になつて、舞姫をあつめました。十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者がありました。頼朝は一目見た上で、萬じゆを呼出しました

が、かほも美しく、すがたも上品に見えました

ので、さつそく舞姫にぎめました。萬じゆは當年やうやく十三、舞姫の中では一番年わかでございました。

奉納の當日は、頼朝をはじめ、舞見物の人々は何千人ともなくあつまりました。一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。此の時には頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞を舞ひま

した。其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆ姫であつたのでございます。

翌日頼朝は萬じゆを呼出して、

「さてく、此のたびの舞は日本一の出来。國はどこ、又親の名は何と申



す。ほうびはのぞみにまかせて取らせるであらう。」と言ひました。萬じゆはおそる／＼、

「べつにのぞみはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。」と申しました。之を聞くと、頼朝のかほの色は

さつとかはりました。かほるも道理、これには深いわけがあつたのでございます。

頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りました。之をさつとて、すぐに義仲の所へ知らせました。義仲からは折りかへし返事があつて、「すきをねらつて、頼朝の命を取れ。」と木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。

光盛の娘は其の後、夜書頼朝をねらひました。が、少しもすぎがありません。かへつて、はだみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。唐糸といふのは此の女のことでございます。

唐糸には其の時十二になる娘がありました。これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りました。が、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて鎌倉をさして上りました。二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あまりも歩き

ら、二見浦を見に行つて、おみやげに貝細工を買つた。とはきないやうにし  
て持つて歸る。  
夕方京都へ立つ。  
三月十九日  
千太どの  
父から

をばり

いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへておまし  
たるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶ  
とよもぎを軒さした。しやうぶ湯を立てて  
ち中の者がはいつた。かしはもちをこしらへて  
いたした。こんなことを思ひ出して垣根の方  
へ行くと、しやくやくか赤い芽を出してまし  
た。

第二十六 伊勢参宮

一 入齋中の兄へ

其の後おさほりもごいせんか。お  
とうさんは昨日分家の叔父さんと、夜  
汽車で伊勢参宮に立たれました。参拜  
をすましてから、京都へ出て、二三日  
見物して歸られるさうです。うちにも  
村にも、かはつた事はありません。

三月十八日  
兄上様  
千太

二 父から

昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮  
へ参り、今日内宮へ参つた。宇治橋を

練

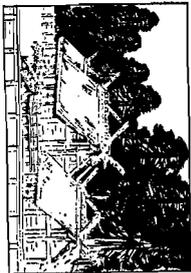
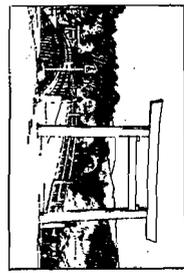
老

尋常小學國語讀本 卷七

もくろく

第一	世界	第二十	アリのきてん
第二	長き行列	第二十一	二植物
第三	横濱	第二十二	一動物
第四	潮干狩	第二十三	海ノ生物
第五	れんげさう	第二十四	木下藤吉郎
第六	鎌倉攻	第二十五	安倍川の義夫
第七	傘松	第二十六	航海の話
第八	馬	第二十七	カズ屋
第九	大阪	第二十八	二 中なほり
第十	獅子と武士	第二十九	
第十一	初夏の夜	第三十	
第十二	大連だより	第三十一	
第十三	一太郎とあひ	第三十二	
第十四	川中島	第三十三	
	一 騎打	第三十四	
		第三十五	電報
		第三十六	注文

渡つて神社に入り、  
千年もたつたかと思  
ふ老木の下へ行つた  
時には、何となく心  
持かかつて、一そ  
うありがたくかんじ  
た。



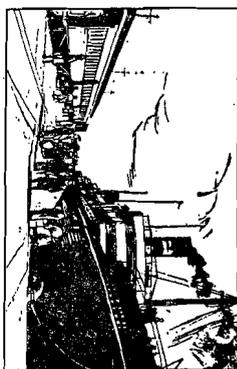
御門の前でうやう  
やくと拜禮してか  
ら、神殿の御もや  
はかやでふいてあ  
白木造で、お屋根  
はかやでふいてあ  
木がならべてあ



り、棟の兩はしに  
は千木が置いてあ  
る。何のかざりも  
ない御神殿を拜し  
て、まことにおそ  
れ多い氣がした。  
参拜をすましてか



支那人は六萬人ですが、日本人は年々ふえるばかりです。



船で来れば、神戸から三晝夜、門司から二晝夜で當地へ着きますが、来て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなとです。第一

第二第三と三つならんでゐて、たくさんな大船をいどきに横つけにすることが出来ます。船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来ます。

大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大連は大阪より少し多いです。輸出品は豆粉が第一で、輸入品は綿布が一番多いといふことです。

獅子はうれしげに一聲高く

怪え、たがみをふるひ、四足をのばして後、しづかに近よりて武士の手をなめたり。これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の従者となれり。



獅子はもとより武士にしたるごととなれり。獅子はもとより武士にしたるを得ざることとなりぬ。船は沖に向ひて港を出でたり。獅子はかなしげにほえて、濱へに立上りたりしが、つと海の中にをどり入りたり。船におよぎつかんとてなり。されどかなふべくもあらず。獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。

なはてつたひに来る風も、若葉のにほひかんばしく、

第十一 初夏の夜

涼 面 蛙 窓 親 連 露 面 並 建 造 會 似

空一ぱいの星は皆、涼しく金にまたりけり。

田の面は水の聲々と、蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は来ぬ。

第十二 大連だより

大連へ来てから、もうかれこれ七八十日、町もやうも大分わかつて来ました。

町に大出通・乃木町・奥町・兒玉町などど、日露戦争の時の大將方の名を取つてつけてあるのは面白いでせう。通は廣くて平で、歩道と車道の間並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいばかりです。

目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、日本の町よりはかへつて西洋の都會に以てゐるといひます。人口はおよそ十一萬、其の中日本人は五萬人

まだ来て三個月で、よくはわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。



旅順へは汽車で一時の間で行けます。

十日はかり前に、私も中學の二年生が修學旅行に行つて、白玉山の表忠塔をあげ、又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。後便に又いろいろ申し上げませう。

六月十五日

良助

愛作君

第十三 一太郎やあ

日露戦争當時のことである。軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、

「ごめんさい。」

といひ、見送人をおし分けて、前へ出るおぼあさんがある。年は六十四五でもあらうか、

氏社競走頭選歲境内歩度各

第三 競馬

昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、勝った子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものが二人あつた。一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。「今年の競馬はさぞ見ものだらう。」といつて、祭の當日には、おびただしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。やがて五人の騎手は多くの人々につきそはれ、しづくと馬を歩ませて、鳥居の中に集つて来た。

神主は先づ神前で祝詞を上げて、それがすむと、「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、「ぜひ勝つてくれ。」「負けたら村のはぢになるぞ。」「しつかりやつてくれ。」などと、口々に勢をつけてゐる。

連 始 甲 乙 後 點(点)

二番太鼓の「並べ」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。馬の頭をそろへて、三番太鼓を今やおそしと待ちかまへてゐる。

三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一さんにかげ出した。始の間はあまり甲乙はなかつたが、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。二人を出した村の者は、たがひに勝利をいはひるので、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。

今度の競走も五分々に進んで行つたが、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころころと池の中へころげこんだ。しかも其所は深い所である。



當 櫻

清水

第一 山の秋

秋は山が美しい。此の間二三度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるであら。林の中へはいると、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、日當りのよい所には、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。



四十雀、目白・ひよどり・もず・ひわ、秋の山は小鳥の聲でにぎやかである。谷間の水はすきとほるやうにすんでゐる。小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずゑでさへづるのである。



燒炭

ろがり合ふのも今である。炭を焼く煙も所々に立ちはじめた。うさぎの毛も間もなく白くなるだらう。

第二 犬ころ

庭のすみで、先程からちやらくとすゞの音が聞える。しゃうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。すると其のうち、僕の見えてゐるのに氣がついたと見えて、じやれ合ふのを止めて、尾をふりながら、ちよこくやつて来た。

僕が庭へ下りて、かはるく頭をなでてやると、喜んで僕の手にとびついて、べろくとなめる。

僕がえんがはへ机を持出して、おさらひをはじめると、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎやうぎよく僕のすることを見てゐる。

ふと、垣根の外でちやらくとすゞの音が聞えた。二匹はいちもくさんにかけて行つたが、間もなくかはいらしいのを一匹つれて来た。仲間がふえたので、又一しきりじやれ合ひをはじめた。

奥 粉 釜 餅 畜 最 初 絶 壁 深

駄 角 轉 得 男 婆 杖 配 小 豆

アルガ、マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサ  
ラツテ行クコトモアル。  
驚ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。巢ハ至ツ  
テソマツナモノデ、人ノヨリツケナイ絶壁ノ間  
ヤ老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニ  
ヤハラカナコケヲ置クダケデアル。春ノ初二  
三ノ卯ヲ産ミ、五週間程アタ、メテ、ヒナニカ  
ヘス。ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜  
ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。

第十四 餅つき

餅をつく音に目がさめた。はね起きて見ると、  
土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、  
盛にゆげが上つてゐた。  
おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、餅  
のつき上るのを待つていらつしやる。おとうさ  
んはきね、おばあさんはこねどり。おぢいさん  
は大釜の火をたいていらつしやる。  
にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへ  
てゐた。

「お早う。」  
といふと、

「よく目がさめたね。今四時を打つたばかり

白

「せいは高くても、まだだめだ。」  
とおつしやつたが、それでもとう／＼一白だけ  
はつき上げた。  
八時頃には、すつかりすんだ。おしまひの一白  
には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、  
近所へも配つた。

第十五 町の辻

雪どけ道のぬかるみを  
杖にすがりてとぼ／＼と、  
歩み來れる老婆あり。  
ゆききの車馬のたえざれば、  
向ふの側へ行きかねつ。」

老婆の前を右左、  
行きかふ男女多けれど、  
北風寒き町の辻、  
身なりいやしき老婆には、  
手をかす人もあらざりき。」

米屋の小ぞうお得意へ  
米を運びし歸り途、  
ひらりと下りて自轉車を  
角の下駄屋にあづけ置き、  
すぐに老婆をみちびきぬ。」

活 號(号) 履 墨 帳 悔

だ。」  
と、にいさんがいつた。  
つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸め  
て、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。  
おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐる／＼  
まはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそ  
なへになつた。  
二白目で小さなおそなへが幾かさねか出来、三  
白目からは、のし餅が出来た。四白目の時は、  
おぢいさんも手つだつてつかれた。  
二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまで  
に、少し間があつた。其の時にいさんが  
「私にもつかせてみて下さい。」  
といひ出すと、おぢいさんが  
「とてもまだ。」  
とおつしやつたが、おばあさんは  
「まあ、ついてみるがよい。」  
とおつしやつた。  
いよ／＼にいさんがつき出した。始のうちは勢  
がよかつたが、間もなく腰がふらつき出して、  
ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたび  
に動いた。おとうさんが

「年の若きに感心な。」  
かくいふ聲を後にして、  
小ぞうは乗りぬ、自轉車に。  
國に母をや残すらん、  
彼のまぶたにつゆありき。」  
下駄買ふ人も、賣る人も、  
下駄屋にありし人は皆、  
彼の姿を見送りぬ、  
さとすべき子にさとされし  
小さき悔をいだきつゝ。」

第十六 看板

學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナド  
ト記シタル看板ヲ出シ、ハキ物屋ニ下駄・草履・  
傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板  
ヲ出セルハ、ヨク人ノ知ル所ナルベシ。スベテ  
看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人  
目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。  
近年人々ノ生活次第ニイソガシクナリテ、見物  
人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩ク  
ガ如キ者ナシ。ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク  
人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キソヒテ小屋根ノ上  
ニカ、グルニ至レリ。

鰯 鯛 鰯 鯛 鰯 鯛 鰯 鯛

毎日のやうに降るにはか雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、何ともたとへやうのない氣持のよいものです。木の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。海の中もなかくきれいです。木のすんでゐる事はかくべつで、波の靜かな所でふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。青・緑・紅・紫・目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。何だかおとぎばなしの世界にでもまよひこんだやうです。

土人はまだよく開けてみませんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、殊に近年我が國で學校をそこゝに立てたので、子供等はなかく上手に日本語を話します。此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

鰯 鯛 鰯 鯛 鰯 鯛 鰯 鯛

いづれ又近い中に便りをしませう。おとうさんやおかさんによろしく。

四月十日  
叔父から

第三 弟橋媛

景行天皇の皇子日本武尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じて、東國の方に下り給ひき。駿河の賊を亡し給ひし後、相模の國より上總の國へこえんとて、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。



既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。其の時、御供にしがたがひ給へる弟橋媛、尊の御身危しと見給ひ、

「これ海神のたたりならん。われ皇子の御身代りとなりて海に入り、神の御心をなだむべし。皇子は勅命を果して、めでたく都に歸り給へ。」

敷皮 敷皮

といひて、菅筵八枚、敷皮八枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。

ふしぎや、今まで荒れに荒れあたる大海、おのづから靜まりて、おだやかなる風となり、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

第四 養雞

朝早く起きて、井戸端に出づ。井戸に近き柿の木、日ましにのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。顔を洗ひをはりて、いつもの如く、庭のすみなるとやの戸を開く。待ちかねたる雞ども、我先にと走り出づ。中に入りてひよこの箱をかゝへ出し、軒下なるかこひの中にひよこを放つ。綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、ちよこくとかけ廻る。

妹は餌箱を持ちて、とやの前に来る。親どりどもすぐに見つけて、其の足もとにむらがる。妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、雞はあわてて其の方へ行く。白・黒・うすかば色、十幾羽の雞一つにかたまり、頭と頭をつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。妹はやがてかこひ近く歩み

鰯

よれば、中なるひよこどもは小さき口を開きて、びよくと鳴きつゝかこひぎはに集る。毎日世話し居ることといづれの雞も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。妹も同じ心にや、しばし見とれてひよこのそばをはなれず。

物置の前なるあき箱より、しよみの殻を取出し、細かに打ちくだく。其の音を聞きつけてかけ來り、飛びちりたる貝のかけを、すばやくつらばみたるは眞白なるめんどりなり。くだきたる貝殻を器に入れてあたふるに、これには餌の時のやうに集らず。

とやの内に入りて見るに、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。昨日の午後に産みたるなるべし。妹の置きて行きたる餌箱に入れて持歸り、茶の間の戸棚の中にしまふ。机の引出より養雞日記を出し、「四月二十五日朝、卵二つ。」と記入す。父上の命にて、養雞は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡されたれば、雞の事は總べて之に記入し置くなり。

朝飯を終へて、妹と共に學校に行く。出がけにとやの方を見れば、めんどりはせはしげに幾度

色 保護 容易 都合 例 蝶 菜 根 雷 枯

か土をかきちらして、餌をあさるにいとがしく、をんどりは箱のふちをふまへて、首をすゑ、むねを張り、今やときをつくらんとする様なり。

第五 動物ノ色ト形

多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロく珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。コンナ體色ヲ保護色トイフ。保護色ヲモツテキルト、マハリノ色ニマギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアアル。

保護色ノ例ハイクラモアル。田ニ住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ緑色。黄色ナ蝶ハ葉ノ花ニムラガリ、白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デアアル。

保護色ヲモツテキルモノノ中ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルガ、冬ニナツテ雪ガ降

例

姿

端

裏

掛

リツモルト、眞白ニナル。又季節ニヨツテカハルクラキデナク、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。



保護色ヲモツテキル上ニ、其ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハリノ物ニ似テ見エルモノモアル。桑ノ木ニ

居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、裏ハ枯葉ニ似テキルノデ、羽ヲトチテサカサニ草木ノ枝ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤウニ見え

反 鮮 器

蜂 蟻 戒 臭



種デアラウ。此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキテ、外ノ蟲ヲトツテ食フモノデアアルガ、羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカく見分ケガツカナイサウデアアル。



ル。シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一

又或動物ハ保護色トハ反對ニ、マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモツテキル。コレ等ハ大テイノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホビノアルモノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、タヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアアル。此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。例ヘバ毒ヲモツテキル蜂ノ體色ガ黄ト黒ノダンダラニナツテヨリ、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアアル。

病

福 修

志 研究

動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロくフシギナ事ガアル。ホンタウニ面白イデアハナイカ。

第六 五代の苦心

病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。少年はひざに両手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。まくらもとに置いてある行燈の光はうす暗く、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。

「これまで折々話した通り、四代前の歡庵様が、國利民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、始めて農學をお修めになり、りつばな書物もお書きになつた。それから元庵様・不昧軒様、二代ついで、其のお志をおつぎになり、一そう研究を進められた。しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調らべて行かねばならぬので、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、四十餘

年の間、寢食を忘れて其の道の書物を讀み、國々の實地を調べ、本もあらはし、出来るだけは骨折つたつもりである。しかし思ふ程に仕事は出来ず、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、役人にくままれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。それから諸國を歩き廻つたすゑ、あの毎日見舞に來てくれる門人たちに頼まれて、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出来上るまでもつまひと思ふ。」

老人は大分つかれたやうである。少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。老人は一口飲んで横になつた。

少したつて、今度は寢たまふぼつくと話し出した。

關(関)係

「歡庵様は佐藤の家の農學の本をお聞きなされ、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、おちい様の不味軒様はまた、地質や鑛物の方で新しい發見をなされた。此の方々のお書きになつたものは、大

精 進 別 旅



い此所に持つてゐる。其の本については、後に又言聞かせるが、大體一家の爲でなく、一寸ち國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろいろの差支があつて、實行が出来ずにしまつた。これはまことに残念な事である。しかしわたしの四十年の骨折は、農學の進歩の爲には決してむだでなかつたと思ふ。

此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ。十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事でもあるであらうが、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。それにはわたしが死んでも國へ歸らずに、す

ぐに江戸へ出て、りつぱな學者を先生にして、一心に學問をはげむがよい。古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。」

目に涙を一ぱいためて聞いてゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。父は安心した様子で、やがてすやくと眠つた。

これは今から百三十年ばかり前に、下野の國尾山中の旅人宿で起つた事で、此の老人こそは出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其の子信淵である。信季は其の後幾日かたつて、とうとう此の宿でなくなつた。信淵は父の門人たちの情で、形ばかりの葬式をすますと、間もなく江戸へ出て、宇田川玄隨・大槻玄澤などの人々をたよつて、一心に西洋の學問を勉強した。さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。

第七 ナイヤガラの瀧

世界一といはれるナイヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大

壯 觀 盛 瀾 紋

遊 覽

な河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋を急がく程です。

瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラの瀧といふのです。瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはどちらも十五六丈あります。

瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行つて、もうくと立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、下手へ廻つて、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。殊に遊覧船に乗つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。



第八 若葉の山道

削

だら／＼坂を登りきると、道は低いみねづたひになる。何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。其所の木のかけ、此所の石のそばには、やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。しつとりとしめりを帯びた一寸ちの道が、足もとからうねうねとつゞいて、やがて茂みの中にかくれてしまふ。

「もう一息だ。」さう思ひながら足を早める。かん／＼とこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げぬのか、手もうす緑、足もうす緑、帯も着物も皆うす緑。あたりの空氣までが何となくぼううつとして、ふろしき包をしよつたせなががじつとりと汗ばんで來る。

目じるしの大げやきの所まで來た時、急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、僕の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

道がだん／＼上りになつたと見えて、谷のこずゑごしに、遠い湖がちら／＼と見えて來た。空ははてもなくすんで、所々にちぎれ雲が飛んでゐる。みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。道端の切りかぶに腰かけて、ひたひの汗をふいてゐると、そよ／＼と吹く風につれて、若葉のほひがひし／＼と身にせまつて來る。うす紅のかへで、銀ねずみ色の櫛、黄の勝つた緑のけやき、どの木を見てもなつかしい。

「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。」と、此の前來た時の事を考へながら、出後れのわらびを一本折つて、又歩き出す。腹が大分すいて來た。もうお晝頃だらう。

やうやく清水まで來て、手の切れるやうにつめたいのを二三ばいづけ様に飲んでみると、大きな青大將が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろ／＼と草の中にかくれて行く。それをじつと見送つてゐると、

「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」と、聲をかけた者がある。頭を上げてみると、

卒

正情防破

息

それは石井君であつた。

第九 兩將軍の握手

リエージュの要塞に立てこもりたるベルギーの勇將レマンは、部下の將卒をばげまし／＼、エンミツヒ將軍のひきあたるドイツの大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ戦ひたり。されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戦死せり。



レマン將軍も、火藥の爆發によりて起れるガスの爲に窒息し居たるを、ドイツ兵に發見せられて、野戦病院に送られたり。



後日レマン將軍が捕虜としてエンミツヒ將軍の前に引出されし時、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め「閣下の防戦はまことに見事であつた。」

歎 譽 胸 劍 強 止 師 彈 丸 屋

と感歎せるに、レマン將軍は靜かに、

「おほめにあづかつて恐れ入る。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。」

と答へたり。

やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劍をときて渡さんとするを、エンミツヒ將軍は

「いや、それには及ばん。閣下の劍は軍人の魂として少しも名譽をきずつかなかつた。」と、強ひて之をおし止めたり。

レマン將軍の目には涙ありき。

第十 水師營の會見

旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル乃木大將と會見の所はいづこ、水師營。」庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじるく、くづれ残れる民屋に、いまでも相見ると二將軍。」乃木大將はおこそかに、

遠くには槍岳・穂高岳・乗鞍岳・立山・剣岳・白山など、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。淺間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、戸隠連山は東北の方に、呼べば答へるばかり近くそばだつてゐます。富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があつてゐるさうです。」

第二十一 初秋

日本晴のよい天気。  
おかあさんと茄子をもぎに出たついでに、かぼちや畠を見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、今日はいもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。  
向ふの畠には、たうのいもが作つてある。黒みがかつた紫色の華が見事に延びて、大きな葉をゆらくと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよい。其の隣の畠にしゃやうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並ん

甘

込

であるのも美しい。  
昨夜雨が降つたせむか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。二十十日を無事に越した田には稲の穂先がもう大分重みを見せてゐる。

たんぼの中程を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。蛙がぼかん／＼と飛込んではずうつと泳いで行く。やがておもだかの華や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいであるのは、鮒やどちやうを取るであらう。空には赤とんぼが幾つともなく飛びまわつてゐる。

うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。今年はなり年なのだ。まだ青いが早く甘くなるたちだから、もう直に食べられる。  
午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

第二十二 北風號

北風はたけが五尺二寸もある黒馬で、毛はうるしのやうにつや／＼しく、見るからに強さうな

軍馬である。北風の主人は若い騎兵中尉で、たいそう北風をかはいがつて、まるで我が子のやうに大事にしてゐた。或年戦争が始つたので、北風も外の軍馬と同じやうに、主人にしたがつて戦地へ向つた。

戦地ではいろ／＼つらい事もあつたが、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。ラツパのひびきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつ。やがて「進め」の號令がかゝると、たゞ愉快にたゞ一生けんめいにかげ出す。戦場の光景は實に恐しいものであつたが、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、砲彈の雨の中でも、銃劍の林の中でも、びくともせず勇ましく活動した。

しかしとう／＼恐しい日が來た。或朝の事であつた。東の空がほんのりと白む頃、北風は外の軍馬と一所に、露營のテントの前に、列を正して並んだ。兵士たちはめい／＼馬のそばに立つて、今か／＼と命令の下るのを待つてゐた。月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

だん／＼明るくなつて來た。中尉の固く結んだ

口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。利口な北風はすぐそれに氣がついた。やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとゞろき始めた。中尉はひらりと北風にまたがつて、亂れてゐたたてがみをそろへ、くびすぢを軽くたゞきながら、

「おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。しつかり頼むよ。」

と、まるで人間に言ふやうに言つた。北風は、主人の手がからしてくびすぢにさはるのが何より好きだつたから、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

「乗馬。」

兵士たちは一せいに馬上の人となつた。馬はどれも皆張りきつて、くつわをかんざり、前がきをしたり、頭をふり上げたりしながら、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

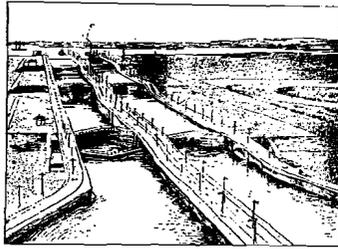
數分の後には、北風はもう列の先頭に立つて進んでゐた。  
其の日の戦は果して今までになくはげしかつ

寄 笛 形 岩 層 伏 割 到

しめやかに、夜の霧 ちまたをつゝみ、  
立並ぶ家々、ともしびうるむ。  
影のごと、人去り 人來る大路、  
ほろ／＼と聞ゆる 笛の音いづこ。  
窓ぎにはひ寄り、ガラス戸ぬらし、  
しめやかに、ひそかに 夜の霧流る。

第七 パナマ運河

北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峡といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。此の地峡に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。



パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろいろの理由があるのので、此の地峡を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出來

結 語

てゐるのである。  
先づ地峡の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。高い土地の上に水をたへたのであるから、湖の水面は海面よりずっと高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じてゐる。所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛けもなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来ないから、掘割の處々に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてゐる。



今太平洋の方から此の運河を通るとする。船は先づ海から廣い掘割にはいる。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。近づくと、門の戸びらは左右に開いて、船が中にはいり、戸びらはしまる。上手にも水門があるので、船は大



きな箱の中に浮いてゐる形である。底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、

此 處 湖 浦 凡 畫

上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

億 費 應 文

るに至らなかつた。最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、十年の歳月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。  
米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

第八 開壟

昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

それから船はクレブラの掘割を通る。これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。掘割を通過して船は又湖に出る。ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。此の湖を渡つて又水門を通過する。今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。此處から又掘割を走つて、終に洋々たる大西洋に出るのである。運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。  
パナマ地峡に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしば／＼計畫したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見



床

入れた。  
後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。主人は答へて、

「あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると静かに戸をしめました。きれいな着方で、つゞしき深いことは、それでよく分りました。談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐ人に親切なことに立つて、椅子をゆづりました。人に親切なことはこれでも知れると思ひました。あいさつをしてもいいねいで、少しも生意氣な風が無く、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよけいなことは言ひません。はき、くしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

私はわざと一さつの書物を床の上に投げて置きました。外の者は少しも氣がつかないらしかったが、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。それで注意深い男だといふことを知りました。着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着

戸 闔 模範 益

て、齒もよくみがいてありました。又字を書く時に指先を見ると、爪はみじかく切つてありました。外の者は着物だけは美しかったが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございまして。」「  
かういふ點から、いろ／＼の美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。りつばな人の紹介状よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。」「

第二十五 平和なる村

我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。全村農業を以て生計を立つ。村の財産家にて事業に熱心なる人、みづから先んじて耕作・養蠶・養雞・養魚等の模範をしめししを以て、近年は作物も改良せられ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村雞を飼はざる家なし。又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を樂しめり。

幸 勤 課 專 林 基 和 榮 増 飾 鉢

役場と學校とは村の中央にあり。村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、常に力を一村の幸福の爲に盡くすが故に、深く村民に敬愛せられて、幾度の改選にも重ねて選舉せられ、既に二十餘年勤續せり。校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、生徒も校長をしたふこと父母の如し。其の他の教員に、生徒は皆よく之になつてきて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に入入することを樂しみとせり。

青年團の事業の一として、杉・檜の植林を營めり。其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。

萬事此の有様なれば、一村は誠に平和にして、年を追うて其の繁榮を増すばかりなり。

第二十六 進水式

今日を晴と満艦飾をほどこされたる三萬四千噸の大戦艦陸奥は、海を後にして悠然と横たはれり。

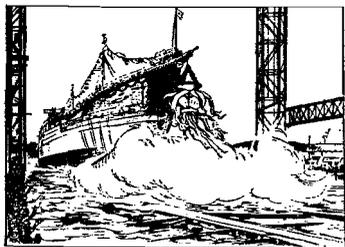
果もなくすみ渡りたる大空、はなやかに流るゝ

奏樂 臨 諭 揮 作 秒 州

日の光、場に満ちたる十幾萬の拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。  
折しも起る「君が代」の奏樂。皇后陛下の臨御と共に、式は始まりぬ。海軍大臣の命名書朗讀、工廠長の進水命令、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

拜觀者の目は、一せいに艦にそゝがれぬ。一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、紅白の紙片花ふぶきの如くに散る中を、羽音高く舞上る數羽の鳩。

拍手かつさい、天地をどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいに



末 貫西 直

煙 果

物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて来た。  
ゴムの用途は、年を追うて益々廣くなるばかりである。

第十三課 ふか

昔、アフリカの或港に一そらの船がとまつてゐた時の話である。

熱帯の暑さにたへかねてゐた船員等は、船長から泳を許されたので、我先にと海に飛込んだ。船には船長と老砲手だけが残つてゐた。

船員等は、如何にも氣持よきさうに泳ぎ廻つてゐたが、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらししてゐた。一人は老砲手の子である。初は十間以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。これまでにくくしてながめてゐた老砲手は、急に氣をもんで、「しつかりしろ。負けるな。」と、甲板からしきりに勵ました。  
ちやうど其の時、「ふかだ。」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。老砲手が驚いて

剽

ふかの口はもうほとんど子供に届いてゐる。  
「あつ。」と、思はず人々が叫んだ。とたんに、ずどんと一發すさまじい大砲の音がとどろき渡つた。

砲手はその結果を見るのをおそれるやうに、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。  
立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、先づ目に入つたのは、大きなふかの死體であつた。

喜の聲はどつと起つた。  
二人の少年はボートに乗せられて歸つて来る。老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝじつとそれを見つめてゐる。

第十四課 北海道

札幌

札幌に來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。市街は此の眞直な路によつて碁盤の目のやうに正しく割られてゐる。主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇が設けてあり、銅像なども立つてゐる。未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町で

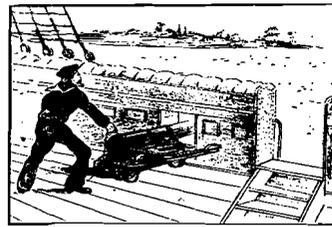
淵 烈 如 暗

拔

緑 放牧

櫻

向ふを見ると、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。人々は叫び聲に驚きあわてて、我先にと船へもどつて来る。しかし二人の少年はまだ知らないらしい。老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃げろ逃げろ。」と聲を限りに叫んでゐるが、二人の耳にははいらぬのか、夢中で泳ぎくらしを續けてゐる。  
救ひのボートは下された。しかしとても間に合ひさうもない。其のうちに二人はふかの來るのに氣がついた。驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。ふかはや十數メートルの近くにせまつてゐる。  
ものすごい程青白くかけた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。つと大砲のそばへ寄つて、急いで弾丸をこめ、ねらひを定めた。



あるから、總べてが大規模でのびのびとしてゐる。  
市外の眞駒内及び月寒には、大きな牧場がある。見渡す限り果もない原野に、放牧の馬や牛がうろく／＼と草をはむ様や、綠草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

狩勝の展望

瀧川から根室行の汽車に乗ると、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかゝる。此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、北海道鐵道沿線中の最高所である。汽車は密林の間をあへぎ／＼通り抜けて、やがてトンネルにはいる。しばらく暗黒の中を通つて再び光明の世界に出た時、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。汽車



には見られない所である。  
 一體人は最初どうして火を得たであらうか。思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。其のうちだんだん人智が發達するにつれて、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとのやうになつた。  
 それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、マツチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。マツチは今から約百年前に發明されたものである。  
 火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、石炭の火は木炭の火よりずつと熱度が高いので、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なものとなつてゐる。

閉 燈 消 完

燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、其の後ろふそくや種油がともされ、石油のランプが之に代り、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。  
 「必要は發明の母。」である。人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。  
 第十六課 無言の行  
 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。小僧一人だけ自由に室内に入らせて、いろ／＼の用を足させた。夜が更けるにつれて燈がだん／＼暗くなり、今にも消えさうになつた。末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。うつかり口をきいてしまつた。  
 「小僧、早く燈心をかきたててくれ。」

は無人の境を曲折して下る。晝がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。はるかの下に一條の白煙をたなびかせて見えがくれする上り列車は、ちやうどおもちやのやうに見える。

十勝の平原

十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは帶廣の町である。明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始りであつた。當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、唯僅かに十勝川を上下するアイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。此の邊の農業は總べて規模が大きい。畠にして、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。中にはトラクターを用ひて全く大農式にやつてゐる處もある。トラクターはちやうど軍用のタンクのやう

吸 識 習 株



な形で、ガソリンの發動機が取付けてある。これが大きな鋤を何本も引いて、ものすごいなり聲を立てながらのそり／＼と歩き廻ると、二間幅ぐらゐに耕されて行く。又開墾する場合には、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めり／＼と音を立てて根こぎにされてしまふ。  
 農業者は多く古い習慣になづみやすいものであるが、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。はてしなく續く廣野の中で、人は自由な大氣を呼吸しながら、土の香に親しんで楽しんで働いてゐる。

十勝の平原は心ゆくばかり晴々しい處である。  
 第十五課 人と火  
 「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物

異

いふお話でしたね。まあ一曲ひかせていたゞきませう。」

其の言方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

「有難うございます。しかし誠に粗末なピアノで。それに楽譜もございませんが。」

と兄がいふ。ベートーベンは、  
「え、楽譜がない。それでどうして。」

といひさして、ふと見ると、かはいさうに妹はめくらである。

「いや、これでたくさんです。」

といひながら、ベートーベンはピアノの前に腰を掛けて直にひき始めた。其の最初の音が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。ベートーベンの両眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。きやうだいは唯うつとりとして感に打たれてゐる。ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地。  
折から燈がばつと明るくなつたと思ふと、ゆらゆらと動いて消えてしまつた。

題

ベートーベンはひく手を止めた。友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピアノとひき手の顔を照らした。しかしベートーベンは唯だまつてうなだれてゐる。しばらくして兄は恐る／＼近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、  
「一體あなたはどうかいふ御方でございますか。」

「まあ待つて下さい。」

ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」

きやうだいは思はず叫んだ。  
「あゝ、あなたももう一曲。」としきりに頼んだ。彼は再びピアノの前に腰を下した。月は益々さえわたつて来る。「それでは此の月の光を題に一曲。」といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にもものすごい、

奇怪

揃

壘

いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。  
「さやうなら。」

ベートーベンは立つて出かけた。

「先生、又お出で下さいませうか。」

きやうだいは口を揃へていつた。

「参りませう。」

ベートーベンは、ちよつとふりかへつてめくらの娘を見た。

彼は急いで家に歸つた。さうして其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を譜に書きあげた。ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのは此の曲である。

第十課 我が國の木材

我が國に産する木材は其の種類頗る多し。今其の主要なるものを擧ぐれば、杉・檜・もみ・つが・ひば・松・落葉松・けやき・栗・かし・なら・くぬぎ等なり。

凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて

殖

柱

築耐 憂香 澤

縮

柔

久

各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。殊に杉は人爲によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にまさり、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。家屋・橋梁・船舶・電柱より楠・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。唯杉に比して産額少く、増殖やゝ困難なるは惜しむべし。

もみ・つがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、杉・檜に比すれば用途甚だ狭し。されど何れも美しき光澤を有するが上に、もみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土臺となすに宜し。

ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。ひばは抵抗力を有し、松は弾力に富

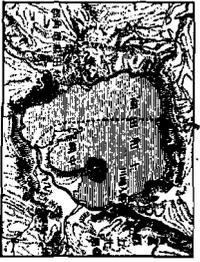
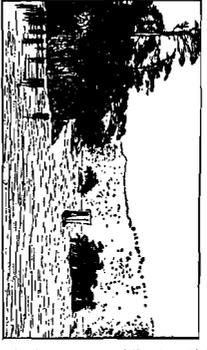
い。これは主として周圍が山で、流れ込む川に  
 大きいのがないのに原因してゐる。  
 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く  
 居なかつた。これは奥入瀬川を十町餘り下つた  
 處に大きな瀬があつて、魚類のさかのぼる道を  
 絶つてゐるからである。今日鱒の産地として世  
 に知られるやうになつたのは養魚經營の賜であ  
 る。  
 第十二課 小さなねち  
 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のね  
 ぢが、不意にピンセットにはさまれて、明るい  
 處へ出された。  
 ねぢは驚いてあたりを見廻したが、いろ／＼の  
 物音、いろ／＼の物の形がた／＼と耳にはい  
 り目にはいるばかりで、何が何やらさつぱりわ  
 からなかつた。  
 しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋  
 の店であることがわかつた。自分の置かれたの  
 は、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラス  
 の中で、そばには小さな心棒や歯車やぜんまい  
 などが並んでゐる。きりやねぢ廻しやピンセツ  
 トや小さな槌やさま／＼の道具も、同じ臺の上

に横たはつてゐる。周圍の壁やガラス戸棚に  
 は、いろ／＼な時計がた／＼と並んでゐる。か  
 ちかちと氣ぜはしいのは置時計で、かつたりか  
 つたりと大やうなのは柱時計である。  
 ねぢは、これ等の道具や時計をあこれと見比  
 べて、あれは何の役に立つのであらう、これは  
 どんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐ  
 る中に、ふと自分の身の上を考へ及んだ。  
 「自分は何といふ小さい情ない者であらう。  
 あのいろ／＼の道具、た／＼さんの時計、形も  
 大ききもそれ／＼違つてはゐるが、どれを見  
 ても自分よりは大きく、自分よりはえらきう  
 である。一かどの役目を勤めて世間の役に立  
 つのに、どれもこれも不足は無きさうである。  
 唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役に  
 も立ちさうにない。あゝ、何といふ情ない身  
 の上であらう。」  
 不意にばた／＼と音がして、小さな子どもが二  
 人奥からかけ出して來た。男の子と女の子であ  
 る。二人は其處らを見廻してゐたが、男の子は  
 やがて仕事臺の上の物をあこれとじぢり始め  
 た。女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やが

み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特  
 性を具へたり。  
 けやき・栗。かしは何れも甚だ堅く、もくも  
 まやかなり。中にもけやきはもくめ美しく、磨  
 けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に  
 裝飾材として珍重せられ、栗は耐久・耐濕の性  
 殊に著しきを以て、家屋の土臺鐵道のまくら  
 木等の用に供せられ、かしは最も堅くして彈力  
 に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈な  
 る力を受くるものを製作するに適せり。  
 かしは又なら、くぬぎと共に新炭材として重要  
 なるものなり。  
 杉は吉野杉・秋田杉を以て第一とし、檜は木曾  
 産の聲譽高く近時臺灣阿里山の檜また有名な  
 り。ひばは津輕半島に最も多く産す。松に至り  
 ては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に  
 至るまで殆ど之を見ざる處なく、其の豊富なる  
 こと我が國の木材中の首位を占む。中にも南部  
 松・日向松は良材として最も世に著る。  
 第十一課 十和田湖  
 十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘  
 は青森縣上北郡に屬してゐる。此の邊は一體に

湖 複

山地で、湖面は海面より四百メートルも高く、  
 其の面積は約六十方キロメートルある。  
 湖岸線は大體單調である  
 が、東南岸だけは二つの  
 半島が並んで突出してゐ  
 るためにやゝ複雑になつ  
 てゐる。岸は絶壁になつ  
 てゐる處が多く、殊に兩  
 半島にはさまれてゐる  
 中湖の東岸の如きは、絶  
 壁の高さが二百メートル  
 以上もある。  
 中湖は深さが三百七十八  
 メートル、此の湖中の  
 一番深い處である。我が  
 國の湖沼中此の湖より深  
 いものは秋田縣の田澤湖  
 だけである。  
 湖の木は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るの  
 であるが、一年を通じて水位の變化は極めて少  
 い。即ち水位の一番高い五月と一番低い一月と  
 の差は、僅かに三十八センチメートルに過ぎな



輝 冠 隨 據 然

系

も徳川家もわざはひを免れて、維新の大事業もとゞほりなく成し遂げられるやうになつた。

第二十七課 我が國民性の長所短所

我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよく、結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。其の上我

短

磨

容

調

が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、とかく引込み思案におちいり易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にするが、雄大な氣風を養成するには適しない。殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。其の結果今日も尚國民は眞の社交を解せず、人を信じ人を容れる度量に乏しい。そこで海外に移住しても外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて來る。すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。其の原因はいろ／＼あらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。今日我が國が列強の間に立つて世界

掃 創 悔 脱 潔

的地歩を占めた以上、かういふ短所はやがて我が國民から消去であらうが、出來る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、賢明な機敏な國民である。他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとするのは、實に我が國民性の一大長所である。しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、昔から殆ど模倣のみを事として來た觀がある。習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。しかし模倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。我々は何時かは模倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそれである。日本人ほどあつさりした色や味はひを好むもの

恥

省

補

はあるまい。あつさりしたこと、潔いことを好む我が國民は、其の長所として謙恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。しかし其の半面には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでゐないか。堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐないか。こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろ／＼あらう。我々は其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、又常に其の短所に注意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばならぬ。